

# 福祉のひろは

7

2012

特集

地域に生きるひとり暮らし高齢者の現実、  
そして動き始めた自治体

小特集

社会福祉現場の食の専門性を問いかける

生活費を切り詰める年金生活者の実態

ヨロップアの「年金改革」

東京都港区によるひとり暮らし高齢者全数調査と新たな政策の創造

河合克義・森 信一・板倉香子・築田 晴

大阪市港生活と健康を守る会

森口藤子

ひろばトーク

いとう

伊藤 チャリトさん

震災後も故郷に帰らず、介護の仕事をしなが  
ら気仙沼で生きていくと決めたフィリピン人妻

編集 総合社会福祉研究所



住む人・使う人が主人公！

私たちは住む人・使う人の  
立場に立って設計しています。  
お気軽にご相談下さい。

## 京都建築事務所

〒 604-8083

京都市中京区三条柳馬場東入中之町10

代表取締役社長 川下 晃正

TEL (075) 211-7277

FAX (075) 211-7270

http://www.kyoto-archi.co.jp/

〒601-8382

京都市南区吉祥院石原上川原町21

http://www.creates-k.co.jp

クリエイツかもがわ



TEL 075 (661) 5741

FAX 075 (693) 6605

価格税込・送料何冊でも240円



全身マヒと突然の無呼吸発作、原因不明の難病が彼女を襲う。音楽家をめざした日々、発病、宣告、気管切開……。前例がないから無理だと言われた歌をあきらめず、自身の障害と向き合い、闘い続けて見えてきたものとは。  
定価1890円

気管切開をした声楽家の挑戦

●歌うことがすべてだった彼女が声を失ったとき——  
わたし、前例を  
つくりまします 青野浩美◆著

最新刊



イギリスの福祉の市場化の歴史、動向を丹念かつ緻密に分析、ソーシャルワークの重要な価値基盤である社会正義や平等の形骸化に警鐘！ 介護保険導入以来、同じ道をたどる日本、多くの貧困者を生み出している政治・社会に、社会正義と平等のソーシャルワークの復権を提起する。定価2520円

新自由主義への挑戦と社会正義の確立

●社会福祉の新自由主義化に抗する実践を！  
ソーシャルワーク  
の復権  
イアン・フアーガソン◆編著  
石倉康次／市井吉興◆監訳

# 食を通して「生きる力」を支援

——現場調理を守る——（城東特別養護老人ホーム）



社会福祉施設の食事は本来、栄養バランスや食材の安全性に配慮しながら、社会福祉活動の一環として提供されるものですが、「食事は自己責任」とばかりに食費の利用者負担や給食の外部委託が進められています。そんな中、城東特別養護老人ホーム（大阪市）では現場調理を続けています。利用者1人分・1日当たり（3食とおやつ）の費用は、人件費・材料費・光熱費込みで1380円。どんな食材をいくらで、どこから仕入れ、どうおいしく食べやすく調理して提供するか。ベテランの栄養士さんも毎日頭を悩ませています。





高齢者は食事が少ししかとれなくなると、体調が大きく落ち込んでしまいます。食べやすくするために、一人ひとりの咀嚼<sup>そしゃく</sup>や嚥下<sup>えんげ</sup>の能力、嗜好<sup>しこう</sup>などを考慮して、ご飯は「小ご飯」「大ご飯」「おにぎり」「軟飯」「粥」「小粥」「ミキサー粥」など、副食は「普通食」「きざみ食」「特きざみ食」「ミキサー食」など、さまざまな形態で提供しています。併設する養護老人ホームの利用者と併せて150人分を、間違いのないように気をつけて盛りつけていきます。



利用者のみなさんは生活棟でグループに分かれて食事をします。以前から適温温冷配膳車を使った適温配膳を行っていましたが、あらたに給食部の職員がご飯や汁物を利用者のそばで温かいうちに盛りつけ、配膳することになりました。食べたい量を聞いて調整することができ、盛り方もよりきれいになりました。



「いつもありがとう。毎日つくるの大変やろけど、よろしくね」。そう言ってもらえると、やっぱりうれしいです。利用者さんの名前と顔を覚えて、食べる様子を間近で見ていると、調理するときも「もっとおいしく食べやすく、つくってあげたい」と思います——。

利用者とのふれあいが、仕事の意味とやりがいにもつながっています。

(関連記事 本誌33～41ページ/写真・文 中島悦子)



## 【ひろばトーク】

震災後も故郷に帰らず、介護の仕事をしながらかんぽ沼で  
生きていくと決めたフィリピン人妻 伊藤 チャリト 6

## ●特集● 地域に生きるひとり暮らし高齢者の現実、 そして動き始めた自治体

【座談会】東京都港区によるひとり暮らし高齢者全数調査と  
新たな政策の創造

河合 克義・森 信二・板倉 香子・築田 晴 10

生活費を切り詰める年金生活者の実態

南野 修二・日下部テル工・星 年子・藤野 英子 24

ヨーロッパの「年金改革」

森口 藤子 29

## ●小特集● 社会福祉現場の食の専門性を問いかける ——栄養・調理の実践と苦闘——

【座談会】

高橋 香理・篠崎 晴美・飯田 尚子

北出 明子・岡田美和子・中島 素美 33

## ●トピックス●

第18回社会福祉研究交流集会in福島〔8月25・26日〕ご案内 42

## ●連載●

フォーラム

夫を看取って——医療と介護のはざままで体験したこと 福井 典子 46

ひとつのこと—社会福祉労働と私たちの実践

保育園にある子育て支援センター 東桃谷幼児の園 48

連載 小川政亮 第二部 自伝（4）

新しい教育・研究の仕事 小川 政亮 50

相談室の窓から

だからこそ専門家の支援と集団保育の公的保障を 青木 道忠 54

わらじ医者 早川一光の「よろず診療所日誌」

不思議、ふしぎ、人間のつくり（その7） 早川 一光 56

よりあって おりあって——宅老所よりあい物語——

父に笑ってほしかった 下村恵美子 58

育つ風景 保育園の運営主体が変わるとき、子どもたちと大人たちは

清水 玲子 60

穂波のアメリカ子育て事情 アメリカの保育システム 吉田 穂波 62

映画案内 『キリマンジャロの雪』 吉村 英夫 64

現代の貧困を訪ねて

大阪市改革は子どもや女性の居場所を奪うのか 生田 武志 66

地球へ途中下車

鉄道がなくなる！——ギリシャ、南北アメリカ 根津 真澄 68

施設訪問ボランティア さくら・ウェルフェアークラブ

ワンちゃんといっしょに 中井 廣信 70

ホームレスから日本を見れば ありむら潜 72

花咲け！男やもめ 川口モトコ 74

## 福祉のひろば

2012年7月号

## ●表紙の絵と写真●

絵=神門やす子

写真=和歌山県有田川町の  
蘭島(あらぎじま)の  
棚田(下野祇園)



## ●カット●

川本 浩

みんなのポスト 44/今月の本棚 73/

しりとりであそぼう！&憲法クイズ 75/福祉の動き 76

●グラビア● 食を通して「生きる力」を支援——現場調理を守る——

# 震災後も故郷に帰らず、 介護の仕事をしてながら 気仙沼で生きていくと決めた フィリピン人妻

伊藤<sup>いとう</sup> チャリトさん

私は一四年前、フィリピンに来た旦那さんとお見合い結婚をし、気仙沼に来ました。一四年間働いた港の水産工場のお母さんたちは、日本語のまったくわからない私に、やさしく教えてくれました。津波で流されてしまった工場には、たくさんの思い出があります。三月一日、私は仕事が休みで旦那さんと家にいました。地震がきた時は、隣にひとりで行んでいるおばあさんも連れて、三人で必死に逃げました。ところが、途中で私はふたりとはぐれてしまいました。次の日に再会できましたが、本当に心配で一晩中泣いていました。

震災後、私がリーダーをしていた教会のフィリピン人団体のメンバーが心配で、牧師さんに名簿をもらって訪ねてまわりました。支援物資を届けたり、生活の相談にのったり、故郷に帰りたいという人は渡航を支援してくれる団体につなげました。七〇人いたフィリピン人は五〇人くらいに減り、今はまた六〇人くらいに増えています。

神戸にある団体の支援で、フィリピン人のためのラジオ放送も始めました。地域で孤立している在日フィリピン人に役立つ情報を届けるため、そしてフィリピンにいる家族に自分の無事を伝えるためです。電話はつながらなくてもインターネットやラジオはつながるので、それがいいと思ったのです。ラジオ放送は今でも続けています。

多くの在日フィリピン人が震災で失業し、今後の「仕事」も大きな問題でした。介護の仕事はどうかとNPO法人難民支援協会の人に相談しました。フィリピンでは大家族での生活が基本で、近所の人のことも自分の家族のように接します。日本でもよく近所の人たちを手伝っていたので、「介護の資格がとれるならぜひ挑戦したい!」と私たちは意気込みました。難民支援協会に支援してもらい、昨年六月中旬、漢字の勉強から始めました。





## いとう ちゃりと

宮城県気仙沼市在住。バイナハン気仙沼フィリピーノコミュニティー代表。東日本大震災後、介護の仕事に就き、「バイナハン気仙沼Radio」（バイナハンとはタガログ語で「助け合い」の意味）を立ち上げ、生活情報や震災情報などを発信中。

週一回、車で岩手県住田町<sup>すみた</sup>まで講習を受けに通い、今年三月三日、無事ヘルパー二級の資格を取得しました。そして今、私はデイサービスで働いています。

フィリピンの家族とは、震災の約三週間後にやっと連絡がとれました。父も兄弟もとても心配して、泣きながら「帰っておいで」と言ってくれました。私も帰りたと思います。だが、日本にも大事な家族がいます。震災前も何度かホームシックになって、故郷に帰りたいと思うことがありました。でも震災で旦那さんとはぐれてしまったとき、私は本当に心配で、悲しくて、私が帰国して旦那さんがひとりになったときの気持ちを考えました。それで考え方が変わりました。フィリピンの家族はとても大切に、帰って無事を伝えたい。でも、日本の家族や近所のおばあさんもとても大切です。その人たちを置いて自分だけ帰れません。日本に残った多くの在日フィリピン人も同じ葛藤を抱えています。

在日外国人のためのヘルパー二級の講習は今も続いています。そこで、働き始めた人たちが集まって介護の勉強を続ける「気仙沼外国人介護会」を立ち上げました。毎日職場でも質問ばかりしていますが、それだけでは足りません。介護の技術と同時に、今後はパソコンの講習もしていきたいと思っています。また、資格を持つていなくても、自宅での家族介護に役立てられるようにと、私たちが介護の技術を教えることもしています。

震災のことは今でも思い出すと涙があふれますが、初めてのラジオ放送で伝え方を学び、いろいろな支援団体とつながることができ、新しい介護の仕事を始め、得たものもたくさんあります。人間を相手にする介護の仕事は学ぶことが多く、とても楽しいです。

私は、気仙沼で生きていくと決めました。もっと勉強し、この仕事を一生の仕事にしたいと思っています。

（聞き手 申 佳弥）

## 地域に生きるひとり暮らし高齢者の現実、 そして動き始めた自治体

生活保護利用者への異常なバッシングの本質は、国民に向けた攻撃であることを見逃してはならない。前号（六月号）の特集「生活保護利用者の『人としての生活』保障を考える」には、「この間の生活保護バッシングのねらいや背景が読みとれた」という感想が多く、読者から寄せられた。冷静に今の動きを見ている人たちも少なくない。

しかし、あれだけテレビなどで取り上げられると、「福祉に お世話になる」ことは恥ずかしいことだ」と洗脳されてしまう。ほんの一部の不正受給をことさら取り上げ、多くの生活保護利用者への抑圧と国民全体への抑制を行い、「待ってました」とばかりに、厚労省からは家族の扶養義務規定の強化を法改正で行うという意向まで飛びだす始末だ。憲法二五条の人としての生きる権利や生活する権利が排除されている。

法人税減税と高額所得者優遇を進めてきた人たちを追及してこそ、マスコミの値打ちがあると言え、バッシングの矛先が違う。「グローバル化だ」と「海外転出」で国民に脅しをかけ、法人税減税・高額所得者優遇を進める政権、それを崩れないように支える「維新」の役割もそこにあるのだと必死に応援しているマスコミの姿こそ滑稽である。

